Finlandia Project

さる事情があって我が家に使用されている建材はフィンランド産の松材である。そんな事情と私が以前勤めていた会社の仕事の単位がプロジェクトと呼ばれる建設工事であったため、私の生涯プロジェクトとして上記のように命名し、玄関の壁に写真のようないたずら書きをした。プロジェクトとは計画、企画などの意味でつかわれるが、私の場合は退職後、山梨に移り住んでから、私が先祖の墓に私が入るまでに行うすべての行為をこのプロジェクト名のアクティビティー（作業の単位）として捉えている。本来プロジェクトは計画の完成を以て終了とするが、私の場合は私の人生の終焉をもってプロジェクトの完了となる少々異質なプロジェクトである。

最近は就職氷河期を通り越してもっと悪い状況にあると言われているが、私が学校を卒業して就職をするときはリクルート社の発行する分厚い会社案内があり、現在とは真反対に学生一人当たり 200 社の募集がある時代だった。私は夏休み前になってもまだ就職活動もせずラグビーの合宿に参加していたとき、主任教授に呼び出され「お前は就職をどうするつもりだ？お前の成績では大学院には行けそうもないから、この中から 1 社選んで持ってきなさい。もし決まっていないならこの N 社と言う所を受けて見なさい。私が口をきいてあげるから。」と言われ、その後約 40 年を過ごした N 社の就職試験を東京の本社に渋々

受けに行った。7 月の終わりには、もうほとんどの内定者は決まっており、私はたった一人で面接試験を受けた。卒論に何をやったかなど聞かれたのち、後に私の上司となった技術畑の役員から「エイティーンエイトについて答えなさい。」と言う問題を出された。私は「エイティーンエイトで思いつくことが 2 つあります。まず第 1 は 1808 年ナポレオンがヨーロッパで台頭し、1812 年のロシアでの敗北まで絶頂期の始まりだった年が一つ目のエイティーンエイトです。」と答えると 7－8 人並んでいた試験官達はきょとんとした顔をしていた。私はそれを無視して「もう一つは 18%クロム 8%ニッケル、オーステナイト系のステンレススチールです。」と、今考えると全く人を馬鹿にした答えをした。本来機械系の学生に対する問題だからステンレススチールの答えだけで十分なのだが、知ったかぶりをして余計なことを言うのは私の悪い癖で今でもまだ治っていない。

しかし私が敢えて 1808 年のことを何故言い出したかと言えば、クラシック音楽ファンならご存知のチャイコフスキーの大序曲「1812 年」に特別な思い入れがあったからである。ナポレオンがヨーロッパ制覇を目論んでロシア遠征に出たが、ロシア側はじっと耐えて冬将軍の助けを借りてナポレオン軍を敗走させた様をチャイコフスキーは「1812 年」と言う音楽で表現した。この曲の出だしは、ロシア正教の賛美歌で始まり、フランス軍の優勢を奏でるラマルセイエーズの旋律が高らかに鳴り、それに錯綜するようにコサック兵の行進曲が流れ立場が逆転していきロシア軍が勢力を盛り返し、最後に帝政ロシアの国歌が祝砲と共に演奏される雄大な音楽であり、大序曲と言う名にふさわしい曲である。

所が、世の中は皮肉なもので、フランスからの圧力を逃れた帝政ロシアが、今度は反対にバルト 3 国やフィンランドにまで圧力を高めたのが 19 世紀の終わり頃である。帝政ロシアの圧政に苦しんだフィンランド大公国の国民の士気を鼓舞するためにフィンランドの国民的英雄ヤーンシベリウスの作曲したのが交響詩「フィンランディア」である。
私がこの曲を初めて聞いたのは、高校 2 年の時、学校で連れて行かれた当時まだ舞鶴城の南側にあった県民ホールでの山田和雄（？）が指揮する読売（？）交響楽団の演奏会だった。私は指揮者の真後ろの席で聴いていたので非常に鮮明に記憶している。この曲は 3 本のトロンボーンがベートーベンの運命の出だしより遥かに強烈に迫ってくるところから始まり徐々に盛り上がりを見せ高みに達したところで、急に「フィンランディア賛歌」と呼ばれ、賛美歌にもなっている美しい旋律を経て、最終章に向かい高らかにもう一度賛歌を歌い上げて終わる何とも血沸き肉躍る音楽である。この曲があまりに挑戦的であるとして

帝政ロシアから演奏禁止になったと言うだけあって、フィンランド国民でなくとも心が熱くなる名曲である。

さて、私の入社試験に出された「エイティーンエイト」とは直接には何も関係のない大序曲「1812 年」を経て、シベリウスの「フィンランディア」に繋がる与太噺ももう少しである。

私の息子が中学生の頃「お父さん、うんこ味のカレーと、カレー味のうんこのどっちを食べたい？」とか、「「お父さん、どうせ死ぬなら血だるまになって死ぬのと、火だるまになって死ぬのとどっちが良い？」と当時中学校で流行っていた質問をしてきた。私は頭にきて、［どっちも欲しくねえ。］と不機嫌に答えたのを覚えている。
もし今、息子が「1812 年とフィンランディアのどちらが良い？」と聞いてきたら、私は迷わずにシベリウスを取る。何故ならフィンランディアは私の生涯プロジェクトであり、それに命を懸けているからである。

完